

『青空の下で読むニーチェ』正誤表

※訂正箇所は以下の通りでございます。お詫びの上、訂正を申し上げます。(編集部)

60頁と61頁 出現順が逆。別紙の通りに訂正いたします。

78頁11行目 〔誤〕平田熱胤↓〔正〕平田篤胤

ミー」と呼んでいた。

ベトナム戦争中に筆者は重いカメラをさげてサイゴンに取材に行った経験がある。もう半世紀昔のことになった。

河畔のマジエステイック・ホテルに一週間とまって、足が棒になるほどに町を歩き回った。夜は連日、焼夷弾の歓迎を受け、翌朝は町のあちこちに爆弾の跡が残っていた。

見聞するあらゆることが驚きだった。

昼のシロン地区（華僑の町でよく爆弾事件があった）は活況に満ちていた。タイガー部隊と言われた韓国兵の駐屯地は、緊張感があり、写真撮影が許可にならない。町には乞食と身体障害者が目立ち、十二歳くらいの少年らが旺盛に働いていた。少年らの活動の場と言えばスリの助っ人、偽両替商の呼び込み、新聞売り、屋台の補助、ホテルのエレベーターボーイ、靴磨き。これら少年達の写真を撮り続け『人と日本』という雑誌のカラー・グラビアを飾った。

毎朝、ホテルから一ブロックのところにあつた喫茶店へ歩いて通った。その喫茶店は新聞記者のたまり場で英語の新聞が読めた。日本人記者が多かった。テンプルの下に潜り込んだ少年が勝手に靴を磨き出した。リキシヤの運転手は老人が多く、知って

いる英語は「ナンバーワン」と「マスター」だけだった。

書店では鈴木大拙、西田幾太郎などの哲学書の翻訳が並んでいた。川端より三島作品の翻訳も多かった。

（明日死ぬかわからぬがゆえに、ベトナム人は哲学するのだ）

夜、付近にナイトクラブやら怪しげな米兵相手のバアが林立。昼間、駄菓子屋だったのが、夜はバアになる。淫売窟も目立った。米兵と韓国兵であふれ、相手の女の何人かはスパイだった。驚いたのは商店に昼、ひっそりと飾ってあつたゴ・ジンジェム大統領の写真が夜はホーチミンに変わっていた。

（何だろう？ この国には忠誠心というものが無いのか？）

ついでだからヴィザの話しよう。筆者がベトナムに取材に行ったのは一九七二年暮れだった。入国審査に一時間ほど。手めくりの手配リストを照合するのでイライラするほど時間がかかった。その上、空港から市内へ入るまでに数カ所の検問所、逐一、荷物とパスポート検査。入国の係官が「おまえは今年ベトナムへ観光ビザで来た六人目だ」と言われた。

そうだ。新聞社に所属していなかった筆者にはジャーナリストビザをもらえず、観光ビザで申請したのだった。東京で申請前に用意した書類はじつに十八種類！ 英文